

① 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 鉦石を運搬する船が港に入る。
- (2) 木々の葉が、夏の日差しを遮っている。
- (3) 国際会議を終えて、各国の代表が懇談する。
- (4) 主人公の心理を巧みに描写した小説を読む。
- (5) 忙しさに紛れて、妹に頼まれた買い物を忘れる。

② 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 長雨でカセンの水かさが増す。
- (2) 同窓会で旧友とナゴやかに語り合う。
- (3) 無線で模型飛行機をソウジユウする。
- (4) 旅行に出かける隣人から小犬をアズかる。
- (5) 人々の期待を集めた博覧会がカイマクする。

③ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

「かいすいよく」を知らなかった。内陸に育ち、もの心ついた頃は戦争が始まっており、海水浴どころではなかった。

「こんどの日曜日、海水浴にいこう。」

敗戦二年目の夏、父がそういったとき、押さえても押さえても口元が笑えてきた。小学校六年、十二歳の夏である。海行きの前夜、わたしのほつぺたは、いよいよ笑いが止まらず、眠りにくいほどであった。

海は豪快だった。松林にふちどりされた砂浜は、リボンのようにするするとのび、パチパチはじける匂いの潮風が、楽隊のように吹きすずぎていった。(1) わたしは、めまいしそうな気分で、父と母に連れられて松林のゴザに坐った。はじめの「かいすいよく」にドギマギしたのである。ゴザに坐って横目でみると、かなりの人出だった。娯楽の少なかったあの頃、海あそびは、人気があったのだらう。「さ、仕度しようかえ。」

わたしは、母が奮発して買ってくれた水着に着がえた。

水着はぴちりと体にはりつき、ギラギラの雲と太陽の下で、それはまるで、ハダカ以上にハダカである。父が、水着のわたしの腰にひもを結び、そこに巾着のようなかわいい袋をぶら下げてくれた。

「これ、なに？」

「おう、干したソラマメをな、ゆんべわしが炒つといたんじゃ。」

「なにをするの？」

「海で泳いだあとのな、おやつじゃ。ほれ、ソラマメと一緒に海に浸つちこい！」

お尻をポンと叩かれて、わたしはそろそろと海へ向かった。(2) そして、また横目をつかって子どもたちをみると、砂をほったり、浅瀬で水をはね散らかしたり、貝殻を拾ったりしている。(はあ！あげなふうにやるんが「かいすいよく」じゃな。) わたしも真似をして海と遊びはじめ、夢中になった。

父と母は、木かげでのんびりしている。わたしは、海の水をなめて、塩からい！と報告し、駆け戻って砂をほり、貝殻をみつけると見せに行き、また海に駆け寄ってバシヤバシヤやっては、少し泳げたと自慢しに行き……忙しい小犬のように海と父母の間を往復した。

そのうち、父と母はうとうと昼寝をはじめ、わたしは貝殻を拾うのが面白くなった。そこで、浜辺を歩き、きれいな貝をみつけては小さなバケツに集めはじめた。ひとつ目にとまると、次から次に美

しい貝殻がみつかる。まるで貝殻と貝殻を結ぶ散歩道である。

(3) 賑やかな浜辺なのに、熱中しだすと、そこはもう、わたしと貝殻だけのシンとした世界になり、時々海に入って体を冷やしては、また貝殻を探す——そればかりしていた。

——どのくらいたつたのだろう。ずしりと重くなったバケツをさげて、父と母のところへ戻ろうと歩きはじめたら、目印のはずの松の木がみえない。というより、どの松も同じにみえる。思ったより遠くまできていたのだ。

さあっと血がひいた。(迷子になった!) 風船が胸につまったみたいだ。息ができない。わたしは、ひっひつと息を吸ったり吐いたりしながら、松の間を走ってふたりを探した。

(4) 見ても見ても「他人」ばかりである。眩しい光の中で、見知らぬ人影は、みな切り紙細工になって、ひらひらゆれている。わたしはコンブレ林の中の魚のように右往左往した。

そのうち「ひっひつ」が「うおーん、うおーん」になった。「とーちやーん! かあちやーん!」と、大泣きして叫んだ。小学六年生にもなつて迷子になった気恥ずかしさなど、ふつとんでしまった。これはオオゴトなのである。とうちゃんとかあちゃんがいなくなつたら、この世も終わりなのである。

夕立のように泣きわめき、「どげんしたん? 迷子になつたんかえ?」と近づく「他人」を依怙地に無視して走りまわるうちに、やつと切り紙細工でない人影をみつけた。大きく口をあけ、手をふりながら駆けよる父と母だ。わたしはぺたんと坐りこみ、今までより大きな声で、びいーと泣いた。

「ほんとにまあ……、お前は糸の切れた風じゃ。わしらもあわてたぞ。ま、にぎりめしでも食え。」

しゃくりあげながらたべても、おにぎりはおいしかった。昼どき

はどうに過ぎていたのだ。——腹一杯になり、しゃくりあげも収まると、世界は徐々に日常にもどり、わたしは貝殻をふたりにみせて自慢した。

暫くして父が思い出したように言った。

「お、直子、その袋、かしてみい。」

わたしは腰の中着のことを、すっかり忘れていた。袋は重たげに腰にぶら下がっている。はずして口をあけると、中から、海水を吸いこんで、ぽつりとふくらんだソラマメがあらわれた。

「柔らかくなつちおろうが。これをな、こうやって食べると、塩味がついとつて、うまいんじや。ほれ、食べてみい。」

父は、わしの子どもの頃、海あそびのおやつといえこれじゃつた、と得意そうである。わたしと一緒に海で遊び、わたしと一緒に迷子になつたソラマメは、ほんとうにおいしかった。

(5) 以来、わたしの海は、ソラマメの味がする。

(工藤直子「父のソラマメ」による)

〔問1〕 (1) わたしは、めまいしそうな気分、父と母に連れられて松林のゴザに坐つた。とあるが、この表現から読み取れる「わたし」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 初めて見る浜辺の明るく華やかでいかにも楽しげな光景に有頂天になり、すぐに海遊びを始めた。くわそわしている様子。

イ まばゆい陽光の下に広がる活気に満ちた海辺の情景に圧倒され、初めての海遊びに心を躍らせながらもとまどっている様子。

ウ 海遊びをする人は少ないと思っていたのに、砂浜の人のあまりの多さに目をみはりつつ騒々しさにうんざりしている様子。

エ 両親から早く海遊びを始めるようにせかされて慌てながらも、美しい海へさつそうと泳ぎ出そうとして意気込んでいる様子。

〔問2〕 (2) そして、また横目をつかつて子どもたちをみると、砂をほつたり、浅瀬で水をはね散らかしたり、貝殻を拾ったりしてい

る。とあるが、「わたし」が「横目をつかって子どもたちを」見たわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 海水浴の仕方がよく分からないため、いろいろな遊びをして

いる子どもたちの様子をひそかに知りたかったから。

イ 心ならずも一人で海水浴をするはめになったことが寂しくて、仲良く遊んでいる子どもたちが気にかかったから。

ウ セっかく海水浴に来たのに、はしゃいで遊び回るだけで泳ごうとしない子どもたちが不思議でならなかったから。

エ 腰に下げている巾着が遊ぶのにじやまになるので、身軽に海水浴をしている子どもたちがうらやましかったから。

〔問3〕 (3) 賑やかな浜辺なのに、熱中しだすと、そこはもう、わたしと貝殻だけのシンとした世界になり、時々海に入って体を冷やしては、また貝殻を探す——そればかりしていた。とあるが、この表現から読み取れる「わたし」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア やつと探し当てた美しい貝殻に見とれながら、辺りに打ち寄せる波の音に耳をすましている様子。

イ 周辺のやかましさをから逃れるために、美しい貝殻を探すことに気持ちを集中しようとしている様子。

ウ 周囲の騒がしさもまったく耳に入らないほど、美しい貝殻を探し求めることに心を奪われている様子。

エ いっしょか周りも静まっているのに気がつき、人のいないうちに美しい貝殻を探そうとあせっている様子。

〔問4〕 (4) 見ても見ても「他人」ばかりである。眩しい光の中で、見知らぬ人影は、みな切り紙細工になって、ひらひらゆれている。

わたしはコンブレの中の魚のように右往左往した。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 強すぎる真夏の太陽に目がくらみ、日陰を求めて人込みの中を駆け回る「わたし」の様子を、ユーモラスに表現している。

イ 人々の色とりどりの水着に目を奪われて、せわしなく歩き回る「わたし」の様子を、ありのままに生き生きと表現している。

ウ 両親の姿を求めて、知らない人々の間を不安にかられながら走り回る「わたし」の様子を、たとえを用いて表現している。

エ 目印の松の下に両親がいないので、見ず知らずの人々に次から次へと聞いて回る「わたし」の様子を、順序立てて表現している。

〔問5〕 (5) 以来、わたしの海は、ソラマメの味がする。とあるが、この表現に込められた「わたし」の思いを説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 海辺でソラマメのおいしいおやつを作っている「父」の苦労も知らずに、迷子になって心配をかけた思い出は、今でも情けない。

イ 楽しみにしていた海で迷子になり、「父」の心尽くしのソラマメさえも十分には味わえなかった思い出は、今なお残念でない。

ウ 海で迷子になったことを厳しくしかった「父」が、ソラマメの味つけに夢中になっていったという思い出は、今ではほほえましい。

エ 迷子になったあとで食べたソラマメの味わいと、「父」の優しい心遣いとが一つになった海の思い出は、今に至るまでなつかしい。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

人間の脳のもつすばらしい可能性の一つが「言葉」であり、言葉を上手に使いこなすことが、更なる可能性を生み出すことは、人間

の歴史が示しています。遺伝子の命令のもとに動く情報系を超えた何かをもつ存在としての人間を考えたとき、その最も顕著な特徴は「言葉」です。ですから、子どもの脳の可能性の中の最大のものは言葉づくりでしょう。(第一段)

たまたま、見た新聞にこんな記事がありました。保母さん、保父さんと幼児教育の研究者の集まりである「子どもとことば研究会」が、発足十周年を記念して書き留めてきた子どもたちの言葉を集めて本を編んだというのです。⁽¹⁾ その中には、例えば「このよでいっとうさいしよに うまれたひとは だれから おっぱいのましてもらったの?」というような大質問もあります。五歳の子が、これだけの言葉を使いこなして、人類の起源に言及しているのですから驚きます。このような事例を見ていると、米国の病理学者で、人間に対する深い洞察をもとにしたエッセイストとしても知られるルイス・トマスの問題提起に心が向きます。一言で言うくと、彼は、「人間に言葉をつくり出したのは子どもだ。」と言っているのです。(第二段)

もつともこれは、彼の独自の考えではなくて、言語学者デレック・ビッカートンの提案に共感しているというのが当たっています。ビッカートンは、ハワイのクレオール語(一八八〇年ごろ、サトウキビ栽培のために、多数の外国人労働者が流入した時に生まれた新しい言語)の研究から、これをつくり出したのは子どもだという仮説を立てました。(第三段)

日本、韓国、中国、フィリピンなどのアジア、プエルトリコ、米本土などからやってきた人々の間での話し合いは難しかったに違いありません。そこで、新しい言語、クレオールが生まれるわけですが、それは大人がつくり出したのではなく、子どもたちによって生み出されたとか考えられないというわけです。ビッカートンは、ハワイのクレオールは、世界中の子どもたちが最初に話し出す言葉

の語順や文法によく似ているとも言います。(第四段)

もちろん、この説自体がまだ仮説であり、今後さまざまな検討が必要ですが、ルイス・トマスは、これをもとに、人間の文化の推進の中で、子どもが大きな役割を占めてきたと考えを広げていきます。子どもが言葉の名人だということは、だれもが認めることです。海外で暮らした人たちは口をそろえて、いかにその国の言葉に慣れるのに苦労したか、それに比べて子どもたちがいかにやすやすと友だちの中に入っていくかを語ります。ですから、トマスが考えをぐんぐん広げていくのにも、つい付いていき、彼が、詩について語る言葉にもうなずいてしまいます。(第五段)

「詩こそ子どもが最も得意とする。子ども時代は、人間の成長過程の中で、詩が根づく唯一の時期と思われる。人間を特徴づける子ども時代がなかったら、私たちの文化に詩が生まれることはなかっただろう。」「長期間続く幼年時代は、ただ単に弱く未熟な期間ではなく、また真の人間性が登場する前に通りすぎなければならぬ発達的一段階でもない。このときこそ、人間の脳が後の段階では消滅してしまう中枢を使って言語や、味覚や、詩や、音楽を取り込む時期なのではないか。もし私たちに幼年時代がなく、猫のように幼児から大人へ一足とびに成長できたとしたら私たちは果たして人間になれるだろうか。」繰り返しますが、トマスの考えは、まだ学問的に証明されてはいません。しかし、どこか説得力のある考え方で、少なくとも私は、かなり共鳴しています。(第六段)

人間は生き物の一つだけけれど、しかし特殊なところがあるというとき、その特殊性の最たるものは「言葉」であり、それが子どもと深く結び付いていることはとても自然なことですが、これまで子ども時代をこのように明確に位置づけたものはありませんでした。このように考えてみると、子ども時代がくつきりと浮かび上がってきます。親ならだれもが子どもたちのつぶやきを聞いて、「この子は

天才じゃないかしら。」と想った経験をもっていると思います。実は、「この子」ではなくて、「子どもは皆」言葉の天才であり、それを思う存分生かすことが、その人が一生を自分らしく生きるための基本を作るのだということなのでしょう。(2) 改めて、「人間の子ども」のもつ意味を知らされた思いがします。(第七段)

子ども時代にもっている可能性を思う存分生かすとはどういうことなのでしょう。具体的には、人間との接触、自然との接触ということになるのですが、その中でも特に大事なものは、子ども社会を存在させるという簡単なこと——と言いかけて、今日これが簡単でなくなっていることが問題なのだと思いましたが、ともかく子ども社会の存在だと思います。原っぱで、子どもたちだけで遊びほうけていた私の子ども時代に比べると、子どものいる所、常に大人あり、というのが現代だと言っても言い過ぎではないでしょう。(第八段)

夏休みに、子どものキャンプをしますといっても、たいていは「大人付き」です。先日も、自然教室の先生が、虫採りだ、食事作りだと、張り切って準備をしていたら、大喜びでのってきたのはお父さんたち、子どもはそのそばでピコピコとテレビ・ゲームをやっていたと報告していました。「自然と触れることは人間にとつて大事です。」という掛け声で、大人が準備した場所に、大人といっしょに行っても子どもの世界にはならないということでしょう。(第九段)

子ども社会のない社会は、社会全体として創造性に欠けた、活気のないものになってしまっているのではないのでしょうか。子どもの問題などといって、大人はわけ知り顔に本を書いたり、議論をしたりしているけれど、実はこれは、子ども離れできない大人の問題なのです。もちろん、大人との接触も重要であり、そこから子どもが多くのことを吸収していくのは当然です。しかし、どうも現代社会の大人は、その接触が上手とは言えないようです。子どもの問題と言われている

ることを解決しようとしている人が、結局大人にぶつかったと語ってくれました。子どものカウンセリングよりも、親のカウンセリングが必要な場合が少なくないと。これは本当に人間が作る社会の豊かさの可能性を摘み取っているのではないのでしょうか。(3) 子どもに、子どもの社会を許す決心が必要です。(第十段)

(中村桂子「科学技術時代の子どもたち」による)

〔問1〕 (1) その中には、例えば「このようで、いっとうさいしょにうまれたひとは、だれからおっぱいのましてもらったの?」と、というような大質問もあります。とあるが、筆者が「大質問」と述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 幼い子どもが深く考え抜いた末に語ったことが、子どもらしい素直な気持ちにあふれた質問になっている、と考えたから。

イ 人類の始まりという神秘的な内容について、幼児が背伸びをして大人の口調をまねしながら質問している、と考えたから。

ウ 幼児のこの言葉は、多くの研究者が探し始めてから発見するまでに十年もの長い歳月を費やした質問である、と考えたから。

エ 幼い子どもが自分なりに言葉を使い、人類の誕生という容易に解き明かせない問題にも触れる質問をした、と考えたから。

〔問2〕 (2) 改めて、「人間の子ども」のもつ意味を知らされた思いがします。とあるが、ここでいう「人間の子ども」のもつ意味とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 子どもはだれでも、優れた能力をもつ人になってほしいという大人の願いを受けて、成長していく存在であるということ。

イ 人間にとつて子どものころとは、隠れた才能を大人に認めさせるために、自分らしさを発揮する時期だと考えられるということ。

ウ 子ども時代は、特有の能力で言葉を身につけ、その人なりに生きる基礎を固める時期として位置づけられるということ。

エ 人間の子どもは、言葉と深く結び付いているという特殊性をもつていても、結局は生き物の一つにすぎないということ。
〔問3〕⁽³⁾ 子どもに、子どもの社会を許す決心が必要です。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 大人が場所や道具の準備を十分に整えているので、子どもだけで自由に行動しても危険はない、と考えたから。

イ 大人が子どもだけの世界を認めることが、創造性に満ちた豊かな社会をつくることにつながる、と考えたから。

ウ 子どもは社会生活を送る上で必要なことを既に吸収しており、今後は大人が接触するまでもない、と考えたから。

エ 現代社会では子どもとの接し方に悩んでいる親が多く、大人には子どものことを任せにくい、と考えたから。

〔問4〕 第三段と第四段との関係を説明したものととして適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第三段で述べた内容を受けて、第四段ではそれを補足して論旨を理解しやすくしている。

イ 第三段で述べた内容に対して、第四段ではそれとは別の内容を示して両者を比較している。

ウ 第三段で述べた内容について、第四段ではそれに反対する立場から別の見解を提示している。

エ 第三段で述べた内容に基づいて、第四段ではそれを順序よく整理して問題点を明らかにしている。

〔問5〕 この文章を読んで、あなたは「子ども時代」をどう考えるか。あなたの考えたことを二百字以内にとめて書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次のAの文章に引用されている古文について、学校の図書室

で調べたところ、B「徒然草」の一部であることが分かった。そこで、Bの部分の現代語訳を探し、Cの文章を見つけた。三つの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

A すでに兼好の時代から、というよりもさらに古くからであろうが、昔に比べて現代風がどうもしっくりしないように思われている。こうした感覚は、何となく私ぐらいの年齢の人間にもかなりはつきりしているが、⁽¹⁾ 古風な感じで落ち着いたものを望むのが今日では大層贅沢であつて、建築の材料にしても他の生活用品にしても、望んで得られることがほとんど不可能に近い。

こうした不満を抱きながら頁を繰っていると、第二十二段に、「何事も古き世のみぞ慕しき。」という文章に出会う。「今様は⁽²⁾ むげに賤しうこそ成行くめれ。」これははつきりした発言である。というより慨嘆である。大工や指物師の作るものを見ても、昔の方が優れていた。

⁽³⁾ それに続けて、言葉の乱れについての指摘もある。古い手紙を読んでみてもその言葉遣いは素晴らしいし、話す言葉も今は全くなさけない。そこにいくつかの例が挙げてあるが、ある言い方はくどくなり、また別の今風の言い方では略しすぎである。

⁽⁴⁾ これは兼好が直接感想を述べたのではなく、年を取った人がそう言っただけで、その通りである、と共鳴している。

⁽⁵⁾ 言葉遣いの移り変わりは、いつの時代にもあったことだし、日本だけに限られた現象ではないが、現在の言葉の乱ればかりはあまりにひどすぎると感じられるのもまた、昔からの現象であつたのだろうか。

〔注〕 指物師——木製の家具や道具類を作る職人。
(串田孫一「古典との対話」による)

B 何事も古き世のみぞ慕しき。今様はむげに賤しうこそ成行

くめれ。かの木の道の匠たくみの作れる、うつくしき器物うつはものも、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

文の詞ふみことばなどぞ、昔の反古ほんこどもはいみじき。ただ言ふ言葉も、くちをしうこそなりもて行くなれ。

(吉田兼好「徒然草」第二十二段による)

C 何事でも、すべて古い時代ばかりが、特別なつかしく思われる。今の世のことは、何とも言いようのないほど下品になってゆくようだ。あの木工の作った美しい器物も、古風な姿のものが、特別おもしろいと思われる。

手紙の言葉なども、昔の反古ほんこ類に書いてあるのは、みな、りっぱなものだ。ふつうに口で言う言葉も、しだいになさけないものになってゆくだけのものである。

(「日本古典文学全集」による)

〔注〕反古ほんこ類——文字等を書いた後、不用になった紙など。

〔問1〕 (1) 古風な感じで落ち着いたものを望むのが今日では大層

贅沢ぜいたくであつて、とあるが、「が」という語を辞書で調べたところ、いくつかの意味・用法のあることが分かった。「望むのが」の「が」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——をつけた「が」のうちから選べ。

A フルートの演奏を聞いたが、すばらしい音色だった。

I 早起きして散歩に行くことが、近ごろの父の日課だ。

ウ 明日は雨にならなければよいが、と曇った空を見上げる。

E 桜のつばみはふくらんだが、朝夕の冷え込みはまだ厳しい。

〔問2〕 (2) むげむげにとあるが、この言葉がどのような意味で使われているか、Cの現代語訳と照らし合わせて調べた。ここでいう「む

げに」の意味に相当する部分を、Cの文章中からそのまま抜き出

して書け。

〔問3〕 (3) それに続けて、言葉の乱れについての指摘もある。古い手紙を読んでみてもその言葉遣いは素晴らしいし、話す言葉も今は全くなさけない。とあるが、Bの文章で、「話す言葉」の乱れについて述べているのはどの文か。相当する一文を、Bの文章中からそのまま抜き出して書け。

〔問4〕 (4) これは兼好が直接感想を述べたのではなく、とあるが、「直接」は漢字を二字組み立ててつくった語である。辞書を使って調べたところ、「直接」は、上の字が下の字を修飾している組み立てであることが分かった。これと同じ組み立てになっているのは、次のうちのどれか。

A 樹木 I 進退 U 換気 E 共感

〔問5〕 (5) 言葉遣いの移り変わりは、いつの時代にもあったことだし、日本だけに限られた現象ではないが、現在の言葉の乱ればかりはあまりにひどすぎると感じられるのもまた、昔からの現象であったのだろうか。とあるが、ここでいう「昔からの現象」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

A 一つの世でも言葉遣いは変わっていくものだが、その時に使われている言葉の乱れが特にはなはだしいと思われる、ということ。

I 言葉遣いの変化を乱れとしてとらえて嘆き悲しむのは、過去の物事にこだわるごく少数の人たちだけである、ということ。

ウ 言葉の乱れを嘆き続けてきたのは日本ばかりではないことが、以前から人々の間に広く知れ渡っている、ということ。

E 古くから使われてきた優れた言葉遣いだけが、いつまでも変わることなく次の時代に伝えられていく、ということ。

国語

1	(1) 運搬	(2) 遮って	(3) 懇談	(4) 描写	(5) 紛れて
---	--------	---------	--------	--------	---------

2	(1) カセシ	(2) ナゴやかに	(3) ソウジユウ	(4) アズかる	(5) カイマク
---	---------	-----------	-----------	----------	----------

3	問1	問2	問3	問4	問5
---	----	----	----	----	----

4	問1	問2	問3	問4		
	問5					25
						100
						150
						200

5	問1	問2	
	問3	問4	問5

得点

--

受検番号

--

1 (計10点)		2 (計10点)		3 (計25点)		4 (計30点)		5 (計25点)	
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	10点	5点
2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点

配点

国語

解答

- ① (1) うんばん (2) さえぎ
(3) こんだん (4) びょうしゃ
(5) まぎ
- ② (1) 河川 (2) 和 (3) 操縦 (4) 預
(5) 開幕
- ③ [問1] イ [問2] ア
[問3] ウ [問4] ウ
[問5] エ
- ④ [問1] エ [問2] ウ
[問3] イ [問4] ア
[問5] (省略)
- ⑤ [問1] イ
[問2] 何とも言いようのないほど
[問3] ただ言ふ言葉も、くちをしうこ
そなりもて行くなれ。
[問4] エ [問5] ア

① [漢字の読み]

(1)「運」も「搬」も、はこぶ、という意味の字。
(2)音読みは「遮断」の「シャ」。(3)うちとけて親しく話すこと。「懇」には「ねんご(ろ)」と読む訓もある。(4)「描」の訓読みは「えが(く)」,「写」の訓読みは「うつ(す)」。(5)音読みは「紛失」の「ファン」。

② [漢字の書き取り]

(1)大小の川の総称。(2)他の訓には「やわ(らぐ)」がある。(3)「操」の訓読みは「あやつ(る)」。(4)音読みは「預金」の「ヨ」。(5)他の音に「幕府」の「バク」がある。

③ [随筆の読解] 出典；工藤直子『父のソラマメ』。

＜本文の概要＞小学校六年の夏、初めての海水浴に連れて行ってもらった「わたし」は、ドギマギしつつも夢中になって遊び始めた。「わたし」は貝殻拾いに熱中しているうちに、いつの間にか両親のところを離れて、迷子になってしまった。大泣きしてやっと父母に会えた「わたし」に、父は、海に入る前に「わたし」の腰につけた巾着袋からソラマメを出してくれた。そのとき食べたソラマメの味が、それ以来、「わたし」の海の思い出と結び付いているのである。

[問1]＜文章内容の理解＞直後に、「はじめての『かいついよく』にドギマギした」とある。単に、うれしくてそわそわしているだけではなく、

初めて見る光景に圧倒されてどうしたらよいか迷っている心情も含まれているものと考えられる。

[問2]＜文章内容の理解＞後ろに「わたしも真似をして海と遊びはじめ」とあることから、「わたし」がほかの子どもたちの様子をうかがって、自分も真似して遊んでいることがわかる。「わたし」にとっては、初めての海水浴なので、ほかの子どもたちが、どのようにして遊んでいるかを、盗み見したのである。

[問3]＜文章内容の理解＞「熱中しだすと～わたしと貝殻だけのシンとした世界」になるのだから、実際の周囲の騒がしさも耳に入らないくらい、一生懸命になって貝殻を探しているのである。「やかましきから逃れるために」集中しているのではない。

[問4]＜表現の理解＞前の段落の「さあっと血がひいた」という表現から、迷子になったことに気付いた「わたし」の不安な心情が読み取れる。両親以外の他人がみんな同じように見えてしまうほど、あわてふためいて懸命に両親を探しているのである。みんな同じに見えてしまう他人を「切り紙細工」に、あわてふためいている自分を「魚」にたとえている点が、この部分の表現の特色といえる。

[問5]＜主題の把握＞ソラマメは一部にしか登場しないが、この物語を象徴的に表しているものといえる。直前に「ソラマメは、ほんとうにおいしかった」とあるように、迷子になったあとだけに、父にももらったソラマメのおいしさが、ひときわ印象深く筆者の心に残っているのである。そして迷子になったときの不安な気持ちや両親の愛情が、ソラマメの味とともに、今もなつかしい海の思い出として筆者の心によみがえってくるのである。

④ [論説文の読解] 出典；中村桂子「科学技術時代の子どもたち」。

＜本文の概要＞「人間に言葉をつくり出したのは子どもだ」という仮説があるように、人間の子ども時代は、言語などを取り込み、一生を自分らしく生きるための基本をつくる時期であるといえる。その子ども時代の可能性を十分に生かすためには、子ども社会を存在させることが重要になってくるが、今日ではその実現が難しくなっている。子ども社会が確立されていない社会は、創造性がなく、活気のないものになってしまうかもしれないのである。

〔問1〕〈文章内容の理解〉直後の一文に「五歳の子が、これだけの言葉を使いこなして、人類の起源に言及しているのですから驚きます」とあるように、幼い子が自分の言葉で、「人類の起源」という大問題について質問したということに、筆者は注目しているのである。

〔問2〕〈文章内容の理解〉第六段落に、子ども時代が、言語、味覚、詩、音楽などを取り込む時期であるということが書かれており、第七段落には、そうした子ども独特の能力を十分に生かすことで「その人が一生を自分らしく生きるための基本を作る」と書かれている。つまり、子ども時代は、言葉を身につけ、自分らしく生きるための基礎づくりの時期である、ということを書いているのである。

〔問3〕〈文章内容の理解〉第十段落の冒頭に「子ども社会のない社会は、社会全体として創造性に欠けた、活気のないものになってしまうのではないのでしょうか」とある。筆者は、子どもだけの社会への大人の介入が、本来子どもに備わっている創造性を損なってしまうことを指摘しているのである。

〔問4〕〈段落関係の把握〉クレオール語をつくったのは子どもだという第三段落の仮説に対し、第四段落ではクレオール語が生まれた背景を述べ、さらにはクレオール語が「世界中の子どもたちが最初に話し出す言葉の語順や文法によく似ている」という第三段落の仮説を裏づけるような話を出している。

〔問5〕〈作文〉まず、自分の書こうとする内容を本文の内容に沿って整理してみよう。筆者は、子ども時代の重要性、子どもだけの社会の必要性を述べている。それに対して、自分がどう思うか、ということを考えてみよう。また、書く際原稿用紙の正しい使い方にも留意しなければならない。書き出しや改行の際に一字下げ、句読点や記号に一マスとっているかなどに気を付けよう。また、誤字脱字がないかなどに注意しながら書き進めていくことも大切である。

㊦〔論説文の読解〕出典；串田孫一『古典との対話』。吉田兼好『徒然草』。

〔問1〕〈品詞の意味〉「望むのが」が、主語の文節になるので、「が」は主格を表す格助詞である。イは「行くことが」が、「日課だ」に対応する主部になる。他はいずれも接続助詞。

〔問2〕〈古語の意味〉「今様は」が「今の世のことは」に、「賤しうこそ成行くめれ」が「下品

になってゆくようだ」に、それぞれ相当している。

〔問3〕〈古文の内容理解〉Bの「ただ言ふ言葉」が、Cの「ふつうに口で言う言葉」に当たる。「くちをし」は、情けない、残念だ、という意味。

〔問4〕〈熟語の構成〉アは同じような意味の漢字で構成された熟語、イは反対の意味をもつ漢字で構成された熟語、ウは下の漢字が上の漢字の目的語となっている熟語である。エは、共に感じる、と読めるので、「直接」と同じ構成の熟語である。

〔問5〕〈主題の把握〉本文の筆者は、現在の言葉の乱れを指摘しているが、『徒然草』の後半からもわかるように、鎌倉時代の兼好も当時の手紙に用いられている言葉や、口に出して言う言葉の乱れを嘆いている。つまり、いつの時代にあっても、自分の生きている時代の言葉の乱れが気になってしまう、という意味になる。

＝読者へのメッセージ＝

作文が出題されていましたが、苦手に感じている人が多いのではないのでしょうか。作文で大切なことは、自分の意見を確実に読み手に伝えようとすることです。全体をうまくまとめようとすることも大切ですが、その前に、何を書くか、何が自分の意見なのか、ということを整理してみることです。それがまとまったら、実際に書いてみることです。練習を重ねていくうちに、必ず上達するはずですよ。